

# ごあいさつ

## ——「教養」って何だ？——

「教養」、この言葉にはどことなく不思議な雰囲気漂う。上品なような、奥深いような、それでいてなにか胡散臭いような…独特の響きを持っている。

東大には、今や珍しい「教養」の名を冠する学部があり、1・2年生の全員がそこで学業を修めることになっている。立花ゼミも、教養学部のカリキュラムの中で開講されている授業の一つだ。

その「教養学部」の、「教養」ということに何度も言及してきた立花隆のゼミであるから、「自らの好奇心のおもむくままに調べて書く、発信する」という活動の根底には、何か「教養」に通じるものがあるのかもしれない。だが、「教養」そのものを正面から扱う企画はこれまで存在しなかった。

今回「教養教育」企画が誕生したきっかけは、立花先生に駒場祭での講演依頼が舞い込んだこと。テーマは「リベラル・アーツの可能性」。まさにこのゼミに「お似合い」のテーマだったようで、論じたい内容や読みたい本は次々出てくる。しかし、読めば読むほど、考えれば考えるほど、この問題の根深さを痛感させられることとなった。現代に関して言えば、受験や就職など、社会全体のテーマともぶつかってくるのだ。

「教養」って何だ？ 答えは、時代によって個人によって本当に様々かもしれない。そんな問いを、まさに今、「教養課程」に学ぶ東大生が考える。

「教養」ってだれが決めるのか？ どこにあるのか？ そもそも本当に必要なのか？

…そんなことを考えていくページにするのが目標だ。

駒場祭の講演会を機に立ち上がった企画だが、扱う内容の幅を考えると、駒場祭後も続けるだけの意味はあると思う。

学生独自の視点で、「教養」の姿を捉えてみたい。

東京大学立花ゼミ「教養と教育」班

## 立花隆の考える「教養」とは？

——先生の考える「教養」とはどういったものですか。また、なぜ私たちには「教養」が必要なのでしょうか。

教養とは、他者があなたを判断するとき、それがないとバカにしたくなるような一連の知的属性。それがあるからといってリスペクトしてもらえないわけではないが、それがあればたいいていの人から、「こいつはいちおうつき合う（対等に言葉をかわす）価値がある」と思ってもらえるだろうような知的属性。その内容として具体的に何をカウントするかについては、個々人の判断基準があり、それがあまりにちがうから、一概に論ずることはできない。教養を身につけるメリットは、標準的知的水準にある人々からバカにされず、いちおうの付き合いをしてもらえるということだ。別のいい方をすると、あなたが、教養がないと思う人間に対して、『お前ホントに教養がないやつだな』と平気でいえるようになれることにある。そこにメリットを感じない人には、特段努力して身につける必要があるというものでもない。ある程度の知的水準にある人は、成人するまで普通の社会生活（学校生活）を継続するだけで一定の教養は自然に身につく。また自分に圧倒的な自信がある人は、教養の必要性など特に気にせず、好きなように生きていけばよい。

——先生ご自身が大学生だったとき、東京大学に限らず大学の教育についてどのような考えをお持ちでしたか？ また「教養」というものをどのように考えていましたか。

昔、東大に入ると、まず、『学問と教養』という本を読むことが義務づけられていた。東大の各分野の教官たちが、学問とは何であり、教養とは何であるかについて分担執筆した本である。これは基本図書のブックガイドにもなっていた。読めば読むほど、新入生たちは、自分たちが学問においても教養においてもゼロに等しい存在であることを思い知らされた。この本を通して、新入生たちは学問と教養の何たるかについてほしいイメージを持ち、それを自分も身につけたいと思うのが普通だった。このようなガイドブックはいつの時代も必要だと思うが、いまはどうなっているのか。

——東大では「教養教育」を掲げ、前期2年は教養教育、後期2年は専門教育とする特徴的なカリキュラムが組まれています。このカリキュラムの下で、「教養教育」は成功していると思いますか。

他校の悲惨な状況と比較すればそれなりに成功していると思うが、改善の余地は大いにある。

——東大の教養課程に関して、「ここがダメだ」「ここを変えればもっと良くなるのに」などと感じている不満や要望を教えてください。もしご自身の手で大学の教育システムを改善するならば、どのような点に着手したいですか？ ビジョンがあれば書いてください。

変えるべきところ（制度とカリキュラム）は多々あるが、東大だけで変えられない側面が多すぎる。詳しくは本日の講演で論じたい。

※講演の様子は、「教養と教育」企画 Web ページでお伝えしていく予定です。